

者ともこの戦いで死亡。

(近畿大学教授)

カナダ史

魅力は「割り切れなさ」

大原 祐子



「カナダ史には、一つの解釈は存在し得ない。イギリス系カナダ人とフランス系カナダ人とは、カナダ史の解釈がまるで異なる。」一九七〇年の秋、プリティツシュ・コロンビア州のウィクトリア大学で、生まれて初めてカナダ史概説の講義を受講した際、カナダ史学史を導入部とされたE.R.フォークス先生(現ニュー・ブランズウィック大学)のアプローチは印象的であった。ニューレフト史学を含めて明快な解釈を呈示するアメリカ史学史にそれまで親しんでいた私にとって、それは考え方の根本的な転換を迫るものであった。思えばあれはカナダ史学の泰斗D.G.クレイトンによる一九六九年六月のヨーク大学における講演「セント・ローレンス帝国の衰退と没落」の後のことであり、フォークス先生の苦渋に満ちた声音も(後にはそれが彼のくせであることも判ったが)、この講演によく対応していた。

日本においてカナダ史に「市民権」を与えたのは、立教大学で私が教えるを受

けた清水博先生であると思っている。先生は、卒業論文にオレゴン問題を取り上げたのが機でカナダ史に興味をもたれたそうであるが、ケアレス著『カナダの歴史』の共訳者になって下さった際、「アメリカ史の理解のためにも、カナダ史を知ることは予想以上に役立つのである」と書いて下さった。清水先生の御教導により私がカナダ史に興味をもつようになったのも、このアメリカ史との比較という視点からであった。そうして気が付くことは、例えばカナダでは「るつぽ」現象があまり問題とされなかったこと、あるいは多言語教育が一〇〇年以上も前に法制化されていたこと等、カナダがアメリカの先を行く、或いは行かざるを得なかった国であったということなのである。これは簡単に言い過ぎているかもしれないが、世界が多種多様で柔軟な思考に耐えなくては生き延びていけない現在、いわゆる大国の歴史の中よりもカナダ史には学ぶべき先例を多く見出すことができるかと考えているのである。誤解を恐れずに言うならば、私達日本人は二律背反的思考に耐えるのが苦手であるように思う。「ナショナルリズム」と言えば幾つかのナショナルリズムの存在は認めるとしても、その中からどれか一つを選ばなくては、と思うのではないだろうか。カナダのよりに民族別、地域別にナショナルリズムが存在するとなると、それはナショナルリズムとは言えないというのはまだしも、それではカナダは国家の態をなさないとはい勝ちなのではないだろうか。

というのが私の偏見であるならば幸いである。カナダ史を学ぶ上で難儀でもあり魅力でもあるのが、この「割り切れなさ」なのである。日本のカナダ史研究者はこれまでは私のように「転向組」が多かったが、最近はいきなりカナダ史に取付く若い方々が出てきた。彼らは全く異なるところからカナダ史の問題と魅力を見出すのではないだろうか。(東京大学助教授)

都市・文化地理学

国土の広さの感じかた

正井 泰夫



カナダは広大な国である。九九八万平方キロという広さは、隣の超大国アメリカの九三六万平方キロをかなり上回り、ソ連に次いで世界二位である。カナダ南部の東西差は五、〇〇〇キロであり、アメリカの四、〇〇〇キロより一、〇〇〇キロも長い。

カナダ南部のアメリカ沿いの幅四〇〇キロの範囲には、カナダ国民のほとんどが住む。とはいっても、二、〇〇〇万人程度であり、東京大都市圏人口よりも少ない。では、この幅四〇〇キロの土地は、いたるところ無人の土地なのだろうか。私は、何本かの鉄道を乗り継いだりして、この東西五、〇〇〇キロの大陸横断

旅行を、これまでにほぼ完成させた。鉄道距離では六、〇〇〇キロぐらいであろう。その沿線は、どこまでも続く山、森、畑という表現が決しておかしくないほど、日本人の目には雄大である。だが、無人の土地というには、あちこちであまりにも人間の影響が見え過ぎる。北極圏はいざ知らず、少なくとも農耕可能な土地の大半は、もうすでに人の住むところとなっている。

それなのに、カナダを旅する人は、カナダの人の少なさに驚ろき、土地の広さを語る。ところが太平洋岸から大西洋岸まで旅するということは、日本でいえば、稚内から鹿児島まで旅をするようなものであろう。この距離は直線で二、〇〇〇キロ、鉄道では三、〇〇〇キロである。人口一〇〇〇万の沖繩を加えると、さらに一、〇〇〇キロ延長しなければならぬ。だが、日本を旅する人は、日本を狭い国だと実感しがちなのである。それはなぜだろうか。

日本国内の旅行は大抵東京から始まる。そうでなければ大阪である。東京も大阪も、「狭い」日本のほぼ真中にある。そして、車窓に展開する景色は、国土の二〇パーセントしかない平野部の超過密居住景観なのである。片道一、〇〇〇一、五〇〇キロがマキシムで、しかも、人口密度の高い所だけを見て(人口密度の少ない山地はあまり見ないで)旅をするので、日本は狭いと感じるのである。広いカナダでも、車窓から見える範囲は有限であり、日本とあまり変わらない。